

性の多様性

■ 性は、男性と女性の2つ…？

人間は、男性と女性の2つに分けられ、それは身体の性(セックス)によって決まるという捉え方があります。しかし、身体の性だけが私たちの性別の認識の根拠なのでしょう？ 例えば、性器がなくなったら、性別への認識や行動はどのくらい変わのでしょうか？

実際には、私たちの性のあり方は、身体的な要素だけでなく、社会的な捉え方や自分自身の認識が大きく影響しているのです。

そして、身体の性や性の認識・あり方は、男女の2つだけではなく、もっと多様なのです。

■ 身体の性について — インターセックス

ヒトの性別は、遺伝学的には性染色体がXXなら女、XYなら男と規定されます。しかし、ヒトの生殖腺、内性器、外性器の組み合わせには多様性があります。男と女の二分法の典型的なパターンに収まらない性をインターセックスと呼びます。インターセックスは、ヒトの性別が二分法で割り切れるような単純なものではなく、むしろ連続体(グラデーション)であることを示しているといえます。

※なお、最近では、インターセックスではなく、「性分化障がい」「性発達障がい」という言葉が、当事者や専門家の間で用いられるようになってきました。遺伝情報や内分泌の変異により、生殖器や泌尿器に分化や発達の障がいが生じているということをより適切に表現するためです。また、日本小児内分泌学会は「障がい」という言葉を用いず、「性分化疾患」という用語(染色体、性腺、または解剖学的性の発達が非典型的である先天的状態を指す医学用語)を提唱しています。

■ 性のありようのさまざまな側面 — 性自認／性役割／性的指向性

自分が女あるいは男であるという性的な自己認知、つまり性自認のことをジェンダー・アイデンティティ(性同一性)といいます。ジェンダー・アイデンティティは、単に性別の認知にとどまらず、「一人の人間が、男性、女性もしくは両性として持っている個性の、統一性、持続性、一貫性」(J.マナー、P.タッカー『性の署名』(1975年、邦訳1979年))という人格全体にかかわる内容としても捉えられており、精神医学の領域では、次の3つの構成要素に整理されています。

- 1) 中核性同一性:自分が男あるいは女であるという自己認知と基本的確信
- 2) 性役割:社会的・文化的レベルでの性別に基づく役割期待および役割遂行
- 3) 性的指向性:性的な興味、関心、欲望の対象が異性、同性、あるいは両性のいずれに向いているかという性的対象選択

自認している性と身体の性が一致しない状態を性同一性障がいといいます。「女性」「男性」以外の性自認をもつ人もいます。

性役割とは、言葉づかいやふるまい、服装、職業などについて、女性／男性にふさわしいあり方として社会でイメージされているもののことを指します。

性的指向性(性指向)が異性に向かう人のことを異性愛、同性に向かう人のことを同性愛といいます。また、性別を大きな基準としない(異性か同性かが重要ではない)バイセクシュアルの人もいますし、性指向が明確でない、またはない人もいます。

※性の好みという意味での「性的嗜好」とは異なります。

■ 性の多様性

私たちの社会は、男女のいずれかの典型的な特徴をもった身体をもち、身体の性と性自認が一致し、その性にふさわしいとされる振る舞い(性役割)を身につけ、異性を愛するという人を“ふつう”と捉えています。しかし、それは身体の性、性自認、性役割、性指向の組み合わせからいけば、ごく一部のパターンでしかありません。実際には性同一性障がい、同性愛やバイセクシュアルの人など、多様な性のありようがあります。

ニートは困った人？

● ねらい

昨今、若年層の不就労問題=いわゆるニート問題(※)が注目されています。

世間的にはまだまだその実情を見つめるよりも、「怠け者」「自分勝手」等といったイメージや言葉だけが独り歩きしているところがあります。

このプログラムでは、青少年の置かれている社会状況を客観的に学ぶとともに、青少年の社会参加や自立への取り組みからも学びながら、イメージや言葉としての「ニート問題」から、多様性を認めあう「私たちのニート問題」としての認識への転換を図ることをねらいにしています。

● 基本概念

若者のエンパワメント、世代間の絆、ソーシャル・インクルージョン

● 時間

130分～160分

● 準備するもの

資料「ニート問題」(参加人数分)〈67ページ〉

ジャガイモ(参加人数分)

おでこに貼る数字の書いたシール(例えば、10・20・70、5・15・80、5・40・55など合計が100になるようにして参加人数分にする)

のり付きふせん紙(7～8cm角 参加人数分×20枚程度 ※多めにあったよい)

模造紙(グループ数)

マーカー(グループ数)

● プログラムの流れ

「私の大切なじゃがいも」

アイスブレイキングをかねて、ジャガイモを使った自己紹介を参加者どうして行います。

【アクティビティ】
ジャガイモで自己紹介

「ニートって何？」イメージを出しあおう

私たちの中にあるニート像を出しあってみましょう。

共通するものもあれば、新たなイメージの発見などがあるかも知れません。

この検討を通してニートに対するイメージを明らかにしながら、共通理解を図り、問題認識のスタートラインに立ちます。

【アクティビティ】
ニートって何？

※「ニート」とは、「Not in Education, Employment or Training (NEET)」という英国における造語であり、仕事に就いておらず、教育や職業訓練も受けていない若者を示します。日本では、15歳以上34歳未満で、配偶者がおらず、通学をおこなわず、仕事をしていない人(内閣府)や、15歳以上34歳未満で、通学や家事をおこなわず、仕事をしていない人(厚生労働省)という定義があります。

ニートの実際は？～資料から学ぶ～

「ニート」と呼ばれる人たちは、どういう実態なのかを資料(データ)から読み取り、自分たちのイメージとのギャップや共通項を考えます。

ここから「ニート問題」の理解や解決に向けてのあり方について、意見交換を行ってみましょう。

【アクティビティ】

ニートの実際は？～資料から学ぶ～

私たちの踏み出し

「ニート問題」の解決には当事者のやる気といった個人的な頑張りだけでなく、広く社会的にどう働きかけるかという私たちの「踏み出し」も必要です。私たちの日常生活の中でできることは何か？アクティビティを通じて体感します。

【アクティビティ】

三人で100

●アクティビティの進め方

●ジャガイモで自己紹介(30分)

参加者には円形に並んだ椅子に座ってもらいます。ファシリテーターが各参加者にジャガイモを1つずつ渡します。

参加者はジャガイモを自分自身に見立てて、自己紹介(あるいは物語)を考えて発表します。

その後、ファシリテーターがジャガイモを一時的に回収し、再び参加者に自分のジャガイモがどれか当ててもらいながら、全員にジャガイモを返します。

ジャガイモはデコボコで土まじりではあるけど、人間もそれと同じで完璧な人は誰もおらず、その中身はジャガイモ同様にきれいなものであり、誰もが「ありのままの自分らしさ」を持っていることを見つめてみます。

また、経済不況などの厳しい社会状況下で、自分らしく生きることの困難さは誰もが抱えており、「人生をやり直せる」暖かい受け皿や環境の必要性について話しあいます。

アクティビティを実施しての感想を聞きながら、社会における私たち一人ひとりのあり方や尊厳について全体で考えます。

！ファシリテーターの問いかけ

「ジャガイモを使ったの紹介はどうでしたか」

「いろいろな人の紹介や物語を聞いて、気づいたことや発見がありましたか」

「自分のジャガイモが分かりましたか。どうして分かったんですか」

「温かい環境とは具体的にはどんなことだと思いますか。ご意見をお出しください」



●ニートって何?(30～45分)

グループ(4～5人)になってもらい、「ニートとは何か」について参加者が持つイメージをのり付きふせん紙にどんどん書き込んでもらいます。それを模造紙に張り出してもらいます。その後、出された意見を分類して、共通に出されているイメージを整理してもらいます。

出されたイメージについて感じたことをグループで討議したり、全体で発表しながら参加者全体の「ニート像」を明らかにします。

※「ニート」を知らない参加者がいたときは、ねらいのところにある定義を説明します。

！ファシリテーターの問いかけ

「自分の抱いていたイメージと話しあったイメージは一緒でしたか。それとも違いましたか」

「参加者の意見を聞いてニートに対する変化がありましたか。あればどのような内容が教えてください」

「このイメージは実際の当事者の実情をあらわすものと思いますか」

●ニートの実際は？～資料から学ぶ～(30～45分)

若者の進路状況を記した資料「ニート問題」を使って、先のアクティビティで出したニート像と実際の当事者の実情とを比べて、その違いや共通性について、グループか全体で討議します。

実情としては、「怠け者」「自分勝手」というよりも、経済不況を背景にした経済構造上の急激な変化(受け皿の激減、正規雇用から非正規雇用への転換など)が、働きたくとも働けない人たちを生み出していることが要因として大きいことを伝えます。

また、いじめなどコミュニケーション上の困難などがあり、幼いうちから社会参加や自立を阻まれて生きてきた人たちが増大していることもあげながら、本人の努力(やる気)だけで解決できる問題ではなく、社会的な支援施策や自立のための援助が求められていることを考えます。

！ファシリテーターの問いかけ

「資料を読んで、皆さんの中でニートに対する認識に変化がありましたか」

「ニート問題は個人のやる気で解決できる問題でしょうか」

「私たちにできることは何でしょうか」

●三人で100(30分)

参加者全員に目をつぶってもらい、その間に、ファシリテーターが参加者のおでこに数字の書いたシールを貼り付けていきます。ファシリテーターの合図で参加者に目をあけてもらいます。

※ここでは、内閣府・厚生労働省のデータを参考資料として掲載していますが、より「ニート」の実態を把握・理解するために、アクティビティを実施する際は、新聞や雑誌記事などを資料として活用することもできます。

次に、参加者に、「声を出さず、自分と合わせて3人の数字の合計が100になるようになってください」と呼びかけます。参加者は、工夫しながら相手を探しあてていきます。3人で100になったグループからその場に座ってもらい、まだ100にならない参加者の様子を見てもらいます。

ファシリテーターは、全員が3人1組になる過程を観察しながら、参加者の自発的な動きに注目します（全員が100にそろわずに時間切れになっても構いません）。

※自発的な動きとして、例えば次のような動きが予想されます。

- ①自分だけでなく、全体が100になるよう周囲に働きかける人がいる（傍観せずに他のグループを積極的に助ける人）。
- ②組み合わせが悪く、どうしても全員がそろわない場合でも、新たな知恵や行動を発する場合がある。

終了後、3人で100になったグループのいくつかに感想を聞き、その理由を出しあいます。そして、この動きからヒントを得て、ニート問題の解決に必要な動き、関わりは何かを具体的に話しあってもらいます。

ファシリテーターの問いかけ

- 「3人1組で100になることをやっていたか」
- 「他グループの動きを見て感じたことがありましたか」
- 「全員がスムーズに100になるには、どのような動きや動きが求められますか」
- 「この動きを現実のニート問題にあてはめると、このアクティビティから学んだことは何ですか」
- 「改めてニート問題の解決に必要な視点は何か、皆さんのお考えを聞かせてください」

●ふりかえり(10分)

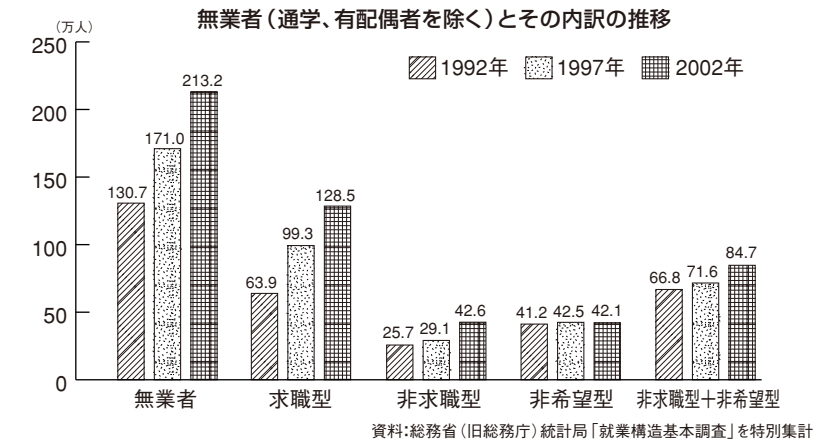
ニートは個人のライフスタイルの自由選択問題ではなく、社会的な構造上の問題であり、私たちの生き方と密接につながっていることへの認識を深めます。

また、その解決には当事者とあわせて、同じ社会の構成員である私たちが、その実情を理解し、受け容れようとする姿勢や行動が求められていることを共有します。

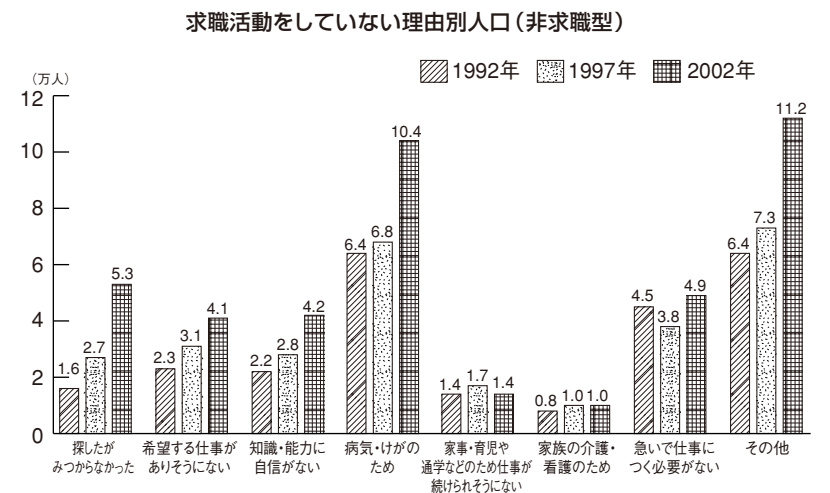
ニート問題

内閣府 求職活動をしていない若年無業者は約85万人
—「若年無業者に関する調査(中間報告)」2005年—

内閣府の調査によると、15歳から34歳の若年無業者(通学、有配偶者を除く)は、2002年時点で213万人に達し、1992年からの10年間で80万人増えました。このうち約129万人は仕事を探している「求職型」なのに対し、残りの約85万人は、就業を希望しながら仕事を探していない43万人の「非求職型」と、就業希望を表明していない42万人の「非希望型」です。この「非求職型」と「非希望型」の合計がいわゆる「ニート」と考えられ、1997年から5年間で13万人増えていきます。



「非求職型」のうち、求職活動をしていない理由としては「探したがみつからなかった」「希望する仕事がありそうにない」等の不況やミスマッチの影響、「知識・能力に自信がない」といった職業能力の不安のほか、「病気・けがのため」が大きく増えています。



厚生労働省 若年無業者は64万人で推移
—2006(平成18)年版 労働経済白書—

「ニート」に近い概念として、若年無業者を15～34歳に限定し、非労働力人口のうち家事も通学もしていない「その他」の者と定義して集計すると、2005年には64万人と前年と同水準となった。これを年齢階級別にみると、24歳以下の者は減少している一方で、25歳以上の者は増加しており、その構成比はより高い年齢階級にそのウェイトを移してきています。1993年からの推移をみると、2001年までは、40万人から49万人と増えてきており、2002年からは若年無業者が家事も通学もしていない既婚者・学生も加えて64万人で推移しています。

